

平成29年度 地域でつながる家庭教育応援事業

東北地区フォローアップ研修 (スマホ時代の上手な子育て)

日時：平成29年10月21日(土) 13:30~16:30
場所：福島県教育会館

【研修の趣旨】様々な立場の人が集まり、講演を聞いたりグループ協議を行ったりすることで、家庭でのメディアコントロールの重要性や子どもたちの良さを伸ばすための方策を社会全体で考える機会とするために、本テーマを設定し研修を実践した。

◆講演！「メディアとの上手なつきあい方」～スマホのある時代の子育て～

講師 実践女子大学 教授 駒谷 真美 氏

1 メディアによる世代別特徴

- (1) 70歳前後→団塊の世代であり、新聞やラジオを主に活用していた世代。
- (2) 60歳前後→お茶の間でテレビを見ていた世代で、メディア＝テレビの世代。
- (3) 50歳前後→パソコン黎明期とも言える。パソコンが導入されてきた世代。
- (4) 40歳前後→デジタルネイティブとも言える。パソコンでインターネットを使うようになった世代。
- (5) 30歳前後→モバイル・ソーシャルメディア黎明期であり、携帯でネットを使う世代。
- (6) 20歳前後→マルチデバイスを駆使する世代。この頃になると、スマホを忘れてしまうとそわそわして何もできないような感覚になる人もいる。
- (7) 10歳前後→ソーシャルメディア全盛期の世代。直観的感覚的操作性をもつようになる。
- (8) 乳幼児期→ソーシャルメディアの定着期。仮想現実や拡張現実などに触れる機会が多くなり、ポケモンGOなどに代表されるメディア中の空想空間と現実社会の区別が難しい場面もでてくる。また、教育の情報化が進み、ICT環境の中で成長していく世代。

2 乳幼児期のメディアとのつきあい方

- (1) 子育ての悩みや不安を聞いてもらったり、子育てに関する情報を共有したりするために、ツイッター等で母親同士のコミュニケーションをとることや、知育アプリを上手に使うことは育児ストレスを解消するための有効な方法である。しかし、スマホに子守役をさせたり、無防備にメディアに接触させたり、ツイッターやインスタ写真による個人情報漏洩が起きたりするなどの問題がある。スマホに偏りすぎて、子どもをないがしろにしてしまうことがないようにしたい。スマホと上手につきあうためには、保護者自身がスマホを何のために使用するのかという目的意識をしっかりとつとめる必要がある。



3 幼児期のメディアとのつきあい方

- (1) 好奇心が旺盛になる時期であるため、スマホに接触したくなる欲求が増える。遊びにスマホが入ってきってしまう環境で、終始スマホに没頭してしまう懸念がある。視覚に悪影響を及ぼす恐れのある3D映像なども見してしまう危険もある。3D映像は、6才以下は禁止されている。
- (2) フィルタリングなどの機械的制限が必要である。メディアコントロールについては、保護者が手本になるという意識が求められる。どうしてもスマホを利用させる場合は保護者と一緒に利用させるべきである。

4 児童期前半のメディアとのつきあい方

- (1) ゲーム課金、性的好奇心からのサイト視聴、架空請求、LINE いじめ、誘い出しを目的としたなりすまし詐欺、デジタルタトゥーなど、様々な危険や問題につながる事が多い。
- (2) 子ども用のスマホを使用させる際は、フィルタリングなどの機械的制限をかけるようにする。また、保護者が一緒に見守りながら使用させていくことが大切である。履歴を確認することを前提に使用させるなどのルールづくりが必要になる。

5 児童期後半、思春期のメディアとのつきあい方

- (1) 児童期前期同様、たくさんのネットトラブルの危険性がある。各家庭でルールを決めた上で使用させ、保護者が見守っていく必要がある。
- (2) 小学校高学年から中学生までは、ネットいじめ監視アプリなど、機械的制限設定したスマホを利用するようにすることも、ネットトラブルの未然防止には有効である。子どもたちが主体的に利用し始める時期であるが、必ず保護者や教師が見守る必要がある。
- (3) 高校生は、機械的制限のあるスマホをある程度一人で使用することを認める時期になる。とはいえ、ゲーム依存、未成年禁止のサイト閲覧、SNSでの不特定人物とのつながり、仲間との過度なコミュニケーション、LINE はずし、不適切な投稿によるデジタルタトゥーなどの危険がたくさんある。子どもたちをネットトラブルから守る上で、保護者の見守りは高校生であっても必要である。



6 まとめ

- (1) ネットトラブルで困ったときには、SOSダイヤルに相談することができる。
- (2) 親子でまじめな話をする雰囲気作り、スマホ使用のルールを一緒に考えること、望ましい生活習慣づくりが大切である。

◆講演II「子どもを伸ばす家庭のかかわり」～スマホがなくてもできること～

講師 東北福祉大学 准教授 高屋 隆男 氏

1 はじめに

- (1) 自発的に行動できない子どもでも、声かけするときにちゃんと行動できることが多い。でも、そのような子どもは、きっかけや支援があれば伸びていくことができる子どもである。
- (2) 子どものやる気をどう引き出していけるか、そして、どのように支援できるかが大切になる。
- (3) 矛盾していることだが、スマホ依存症を解決するためのスマホアプリがある。

2 大好きな人に認められたい子どもたち

- (1) 子どもたちは、認めてもらいたい欲求をもっている。どの子ども、頑張ったことを認めてもらいたいと思っている。どんなに小さなことでも、ほんの少しのことでも、頑張ったことを認めることは、子どもたちの伸びにつながっていく。



3 子どもを伸ばす家庭のかかわり

- (1) 子どもは、大人には分からない場所に安らぎを覚えたり、大人が何とも感じない物を大切にしたりすることがある。大人が、子どもがほっとする居場所や物（アイテム）などを見つけてあげることや、認めてあげることが、子どもが安定した気持ちで生活を送ることにつながっていく。
- (2) 人は、何かを実践しているときや集中して取り組んでいるとき、遊んでいるときに途中で止めさせられることは欲求不満状態になる。子どもに「〇分になるまで」とか「〇回やったら」のように、行動の終わりを予告しておくことで、子ども自身が納得して次の行動に移ることができるようになる。
- (3) 問題行動の視点をプラスの見方に変えることが必要である。何かにこだわることは必ずしも悪いことではない。また、主体的に行動できない子どもは、「アドバイスがあればできる子」と考えることもできるのである。
- (4) 「きちんと子どもの生活につきあうこと」「子どもの気持ちに共感すること」「子どもの側に立って物事を見ること」は子どもと付き合うための3ヶ条である。



4 おわりに

子どもが育つ魔法の言葉（ドロシー・ロー・ノルト）
【アメリカインディアンの教え】

◆グループ協議「家庭や地域での取組」

講演Ⅰと講演Ⅱを受けて、「メディアの上手な使い方」と「子どもを伸ばす家庭でのかかわり」について、家庭や地域で大人ができることを話し合った。それぞれのグループで、活発な意見交換がなされた。

【話し合われた内容や意見】

ア「メディアの上手な使い方」について

- ・ 現状として、親が無造作にスマホをやっている姿を見せている限り、子どもに注意するのは無意味。親子での勉強が必要である。
- ・ 次の3点が大切。①スマホのフィルタリング、②ルールを作成、③ルールのもとで共に楽しむ。要は親子のコミュニケーション。
- ・ 少し前までは「ノーマディア」を取り上げていたが、今はメディアとの向き合い方を親子で話し合った方がよいと思う。
- ・ 次世代の子どもたちは、確実にICT教材を使用したり、マルチメディアを使ったりすることができるので、親世代も社会全体でメディアとの向き合い方を学んでいくことが重要だと感じた。
- ・ 親のスマホの使い方が、子どもにどのような影響を与えるかが心配。親や大人が学ぶことができる研修の機会が必要。
- ・ メディアは子どもと親で一緒になって理解しないとイケない。頭ごなしに子どもに言ってもだめ。子どもの話にも共感しつつ、使用時間などのルールを決めなければいけない。
- ・ ダメダメで禁止するのではなく、今はメディアとどう付き合っていくかに変わってきている。その導き方が大切になってきている。
- ・ 現実問題として、結論の出ない問題で、このような社会を作り出したことが子どもを病ませることになっている。
- ・ メディアやスマホの使い方に関して、各家庭での考え方に温度差がある。自分の家庭では“こう”というルールをしっかりと作っておくことが大切。
- ・ 親子の会話、きずなが大事。それがないとルールも作れない。
- ・ 時代としてメディアと付き合っていくかなければならない。良い悪いではなく、一緒にどう付き合っていくかを考えて行くことが大切。子どもも保護者もメディアに関する学習をしていかなければならない。
- ・ 大人や親の姿勢、影響が大きい。親子のかかわり、絆が大切。年代によって考え方や育った環境が違う。それぞれを理解しつつ、対応していく。正しいというか、よりよい判断をして、実行し、習慣化していけると良い。

イ「子どもを伸ばす家庭でのかかわり」について

- 家庭も学校も子どもの居場所作りのためには、相手をよく知り、話を聴くこと。今も昔も根本になるのは、人間同士のつながりである。
- 子どものやる気に火をつける言葉かけやタイミングが難しい。
- 子どものやる気スイッチの入れ方について、意識していきたい。
- プラスの考え方で前向きに子どもと向き合う心構えを忘れないようにしたい。
- 子どもは話をよく聞いてくれる人や大好きな人の話をよく聞く。それが、子どもの居場所作りややる気スイッチにつながっていく。
- 子どもの言いなりになっている親が多いが、どんなことにも強く生きていく子に育てることが大事。
- 親として、子どもをほめることの重要性は理解しているが、なかなかできない。子どものやる気スイッチを探そう。
- 「居場所」「やる気」「納得」という3つのキーワードは子どもを伸ばす上で、学校・家庭に共通である。
- 「子どもを伸ばす」と言葉で言うのは簡単。しかし、実際にやろうとすると根気が要る。子どもの成長に合わせて関わり方を変えていくためにも、大人の学びが必要だと思う。
- 大人がどのように子どもたちと向き合うかが大事である。そのためにも、大人自身が模範とならなければならない。
- 子どもの話を聞く。「聞く」ということがとても大事。
- 子どもの居場所作り、やる気の起こさせ方など、どれも大きな課題であり、すぐに改善されることではないが、一歩ずつ前に進んでいけるように日々努力していきたいと思う。



◆まとめ

ア 駒谷氏から

- メディアを全面禁止にすることが問題解決につながるわけではない。全面禁止にすると禁止されたことに対するリバウンドが起きてしまい逆効果になるという研究結果がある。また、スマホをきっかけにコミュニケーションをとっていけることもあるので、スマホと上手につきあっていくことがこれからの時代は求められる。
- スマホと上手につきあうためには、便利な反面、落とし穴もあることをきちんと理解し、家庭でルールを共有することが重要になる。

イ 高屋氏から

- グループワークでは、参加者の皆様が自分の言葉や考え方で意見を交わしていることに感銘を受けた。
- 子どもたちが、自分の言葉で、自分の考えを話すことができるように支援していきたい。

【研修を終えて】

- 2つの講演を通して、メディアに対する望ましい取り組み方や子どもの良さの伸ばし方について、認識を新たにすることができた。
- 幼・小・中の保護者や教職員、家庭教育支援に関わる方、社会教育行政関係者、家庭教育応援企業の方などが一同に介し、それぞれの立場から意見交換を行うことができた。自分とは違う視点からの話を聞くことで、子どもたちのために家庭や社会でできることをより深く考えることができた。
- 様々な立場の人が集まり、講演を聞いたりグループ協議を行ったりしたことで、社会全体で子どもたちを育てていくことの重要性を改めて認識することができた。
- 今回の研修で学んだことをそれぞれの家庭や地域で実践し、社会全体に広げていくことが求められる。